

# 『しろばんば』にみる少年期の死生観とデス・エデュケーション

——現代におけるデス・エデュケーションへのヒント——

小山 真理\*

Perspectives on Life and Death as Seen Through the Eyes of a Boy in “Shirobanba”:  
A Suggestion for Modern Death Education

Mari Oyama

**要 旨** 医療技術の発達した現代では、人の誕生も死の看取りも医療機関でなされるようになり、死が身近なものではなくなった。特に日本人は死について語ることを避け、忌み嫌うものとして隠蔽する傾向がある。だが、かつてはデス・エデュケーションなどと言わなくても、死は家庭や地域の日常生活の中にあり、子どもたちも自然と学べる環境にあった。そのような時代を舞台とした『しろばんば』より死別の場面を取り上げ、主人公の心情と照らしながら見ることによって、少年がどのように死を受け止め、その死生観を育んでいったかを考察した。そして死別による喪失の苦しみを、少年なりのグリーフワークによって現実のものとして受け入れ、成長する姿を追いながら、周囲の大人たちがいかに重大な役割を担っているかを改めて確認するに至った。大正時代において自然に行われていたデス・エデュケーションやグリーフワークを、現代にそのまま要求することは困難だが、「いのちの教育」を子どもだけが学んでも意味はなく、まず大人に対するデス・エデュケーションが最重要課題であることが示唆された。

キーワード 死生観 デス・エデュケーション グリーフワーク

## 1. はじめに

死生観とは「死についてのとらえ方、考え方、および、死の対概念としての生についてのとらえ方、考え方」（大林，2008: 215）である。『臨床死生学事典』（2000: 18）によれば、「個人の死生観は社会の基盤である文化、宗教に大きく規定されており、その上に個人の体験、思考の傾向などが加わり形成される」とあり、そのとらえ方、考え方は個人により異なる。昨今、『おくりびと』のアカデミー賞外国語映画部門での受賞や臓器移植法改正案などが話題となり、日本人の死生観に関する話が取りざたされた。だが、それを機に「死」について考えようという動きにまでは発展しない。

筆者は16年ほど前に偶然「デス・エデュケーション」を知り、前任校において、留学生を対象とした日本語の研究授業に取り入れたことがある。普段語ることのない死というテーマで授業を行うのは初めてであったが、学生たちは積極的に参加した。その後、阪神大震災や地下鉄サリン

\* 本学准教授 日本語教育

事件などの大災害や凶悪事件が立て続けに起き、本人もしくは身近な人の突然死が他人事ではなくなった。そうした中、不安を抱いて来日する留学生の心のケアが必要ではないかという思いもあり、大学に異動後はデス・エデュケーションを意識した授業も取り入れてきた。しかし近年、18歳人口が減少し、大学も全入時代を迎えて、心に問題を持つ学生が何の事前情報もなく入学するようになり、常習的にリストカットをしたり、自殺願望を安易に口にしたりする学生が目立つようになってきた。そこで、デス・エデュケーションが必要なのは、むしろ日本人学生のほうではないかと思いはじめたのである。

だが、現代は死が家庭から遠ざけられ、生命の誕生も死も医療機関で行われ、たまに映画などで話題に上ったとしても、それは一時的現象であり、死はタブー視されるばかりである。しかしながら、2001年の池田小学校児童殺傷事件や2008年に続けて起こった荒川沖駅や秋葉原での無差別殺傷事件など、無闇に人の命を奪うような悲惨な事件や、2005年のJR 福知山線脱線事故などの安全軽視による大事故は後を絶たない。このように命の重さが感じられなくなっている時代に行えるデス・エデュケーションとはどのようなものであろうか。

その模索のために、まだ死が身近であった大正時代を舞台とした小説『しろばんば』から、死別体験の場面を取り上げ、どのようにデス・エデュケーションが行われ、少年の死生観が育まれていったかを、主人公の心情と照らしながら見ていくことにした。また、大切な人を失うという悲しみを乗り越えるために、主人公が行った「グリーフワーク」にも注目した。そして、それらをヒントに、現代のデス・エデュケーションには何が必要であるかを考察した。

## 2. デス・エデュケーション

### 2-1. デス・エデュケーションとは

デス・エデュケーション (death education) を文字通りに訳すと、「死の教育」である。『生命倫理事典』(2002: 461) では「死を身近なものとして捉え、そのことにより、死によって浮き彫りにされる生の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に向き合っていく姿勢を涵養する教育」とある。アメリカでは1960年代にミネソタ大学において「死の準備コース」という科目が設けられ、それを契機として他大学でも死に関するコースや学科が次々と設立されていった(平山, 1985: 147)。その後、イギリス、ドイツ、スウェーデンなどの西欧各国でもデス・エデュケーションの必要性が叫ばれ、小中学校の授業にカリキュラムとして組み込まれている国もある(デーケン, 1997: 91-94)。また現在では、台湾、韓国などアジア地域での教育現況や実践報告もある(得丸, 2008)。

日本では1959年来日し、普及活動を行ってきた人物としてアルフォンス・デーケンの功績が大きい。特にデーケンを中心として1983年に発足した「生と死を考える会」により、デス・エデュケーションは徐々に日本各地へと広まっていった。デーケンは日本語訳を考える際、「死への準備教育」としたが、それは「人間は死ぬ瞬間までは生命ある存在である。自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育という意味」でつけたとしている(デーケン, 2001: 3)。

小中学校では総合学習などで「いのちの教育」として導入されるようになり、2006年の全国調査によると、小学校で7割、中学校で6割を超える学校が授業を行っているという（近藤，2009: 51）。だが、小中学校で一貫したカリキュラムがあるわけではなく、実施頻度や活動内容については各学校または教師の裁量に任されているのが現状だ。さらに、死を学校で教えるべきか、また教えられるのかといった議論もある。しかし、デス・エデュケーションは死を見つめることで、生を見直すことであり、人間が生きる上で死を切り離して考えることはできないのである。

## 2-2. 日本語授業でのデス・エデュケーション

留学生対象の日本語授業におけるデス・エデュケーションとして、筆者は感想文や意見文を書かせることを目的に、「赤ちゃんポスト」「ヒナから育てたニワトリの解体実習」や戦争中の話を取り上げることがある。また、「日本人と宗教」「お盆」などを紹介して自国と比較させたり、大地震の体験談から、日本にいる限り避けることのできない地震の知識と対応策を学ばせたりもしている。ただし、シラバスや学生のレベルなどに合わせて教材を用いており、毎年行うとは限らない。このような授業は、本来1年を通して段階的に行うのが望ましい。しかしながら、筆者の担当はあくまでも日本語という語学授業のため、デス・エデュケーションを前面に出したカリキュラムを組む状況にない。

ここでは、2年次生の最後に行っている授業の流れを簡単に紹介しておく。まず、「死」という言葉から受ける印象やイメージを自由に言わせ、「死は怖いか」「なぜそう感じるか」などについて意見交換をする。その上で、『死とどう向き合うか』（デーケン，1996）を参考にまとめた「生きるということ」という本文を読ませ、「死の準備教育」について説明し、これは死ぬための準備ではなく、「よりよく生きるための教育（ライフ・エデュケーション）」であるということを理解させる。

その後、日本人を対象に行われた「死」についての雑誌アンケート（『CREA』，1994）をもとに作成した聴解教材を使用し、日本人が死をどう捉えているかを概観する。そのアンケートの質問は「死ぬことが怖いかとその理由」、「死について考えたことがあるか」、「死に備えて何か準備していることがあるか」、「今までで一番印象に残った死を具体的に」という4項目である。データは多少古いが、日本人の死生観をイメージする素材となる上に、回答の内容に現在とさほど大きな変化はないと判断したため、そのまま使用している。また、聴解教材を使用せずに、上記の項目について、ペアやグループで支障のない範囲で話し合わせることもある。しかし、死生観は個人的なもので人によって異なる上、語ることを拒否する学生もいるので、その扱いには注意しなくてはならない。

以上のような、ブレイクストーミングの後、現在を起点とした直線上に「私の人生計画表」を作らせ、未来の自分の姿を想像させる。その際、何歳まで生きるかも自分で決めさせ、卒業、就職、結婚、子育て、老後などについて具体的にメモさせていく。将来の夢が膨らんだところで、「もしあなたがあと半年の命だったら」というテーマを与え、体は自由に動き、寝たきりではないということを経験に、以下の質問に一つひとつ答えさせる。

- ①いちばん最初に何をしたいですか。                      ②いちばん大切にしたいことは何ですか。  
 ③何かを残したり，整理したりしますか。                ④誰のために時間を使いますか。  
 ⑤今の生活を変えますか。何か始めますか。今までと同じように生活しますか。

上記①～⑤の答えについて，教師が机間巡視して見ることはあるが，クラス全体で発表させたり，書いたものを回収するようなことはしない。この余命半年という設定は現実的でないにもかかわらず，学生はかなり真剣に考え，自分の内面と向き合っていく。

最後は，自分の答えを見直して，「したりないこと」「後悔していること」「人に謝罪すべきこと」などがある人は，生きている今のうちに解決，または解決する努力をしておこうと提案し，授業を通して感じたこと，思ったことを無記名で書かせて提出させる。

この授業に対する学生の反応は非常によい。最後の感想において「今までの授業の中でいちばんよかった」と書く者さえおり，これまでの自分の留学生生活を反省する学生が多い。死は誰にでも訪れると頭では理解していても，忙しい日々の中，時間を取って考えることがないため，わずか90分の授業であっても，これまでの生活を見直すきっかけになるようだ。このような授業を日本人学生に対して行ったことはないが，留学生の場合，宗教を信仰している学生も多く，その教えの中で普段から生と死を考えている学生も少なくない。さらに，強い意思をもち，親元を離れて来日する決意をしているため，その覚悟は日本人学生と異なる点がある。

### 3. グリーフとグリーフワーク

グリーフ (grief) とは「悲しみ」「悲嘆」などと訳されるが，ギルバート (2005: 252) は「悲しみの意味のほか，心の痛みの表現や怒り，それらの体験を含む」と述べている。グリーフは別離や死別などの喪失体験によって引き起こされ，それを克服するまでには悲嘆のプロセス (grief process) を踏むとされている。諸説はあるが，デーケン (1996: 37-46) はこのプロセスを12段階に分け，「①精神的打撃と麻痺状態②否認③パニック④怒りと不当感⑤敵意とルサンチマン (うらみ) ⑥罪意識⑦空想形成，幻想⑧孤独感と抑うつ⑨精神的混乱とアパシー (無関心) ⑩あきらめ—受容⑪新しい希望—ユーモアと笑いの再発見⑫立ち直りの段階—新しいアイデンティティの誕生」としている。これらは必ずしも順番通りに起こるわけではなく，勿論すべて経験するとも限らない。また，グリーフが大きければ大きいほど克服に時間がかかり，症状が悪化して精神異常をきたす場合もある。だが，通常はこのプロセスでの体験，つまり，グリーフワークによって，徐々に改善され，最終的には乗り越えていく。グリーフワークは「mourning work」とも言われ，「喪の作業」「喪の仕事」「悲嘆の仕事」などと訳される。『臨床死生学事典』(2000: 234) では悲嘆のプロセスの中で大切なのはいつでも後戻りできることであるとし，さらに以下のように説明を加えている。

人の心はあるときは前進し，あるときは後退しながら耐えがたい苦しみを受け入れていく。

グリーフワークはつらい作業と言える。しかし問題に直面化し，明確化して，意識にのぼらせることによって初めて心は現実を理解できる。

つまり，グリーフワークはただ何もせず悲しみに打ちひしがれるだけではなく，行きつ戻り



家は近いが、一緒に住んではない。おぬいは妾という立場であったため、周りの人々から白い眼で見られながらも、半ば洪作を人質にとるような形で自分のそばに置いて溺愛した。おぬいにとって洪作はすべてであり、生きる目的であり、生きる術であった。この小説は、おぬいが亡くなり、洪作が13歳で中学受験をするために浜松に行くまでを描いたものである。

## 5. 『しろばんば』における3人の死の場面と洪作の受け止め方

### 5-1. 曾祖母「おしな婆さん」の死（70歳前）：洪作小学校3年生の5月頃

「二人とも、ようくおお婆ちゃんの顔を見ときなさい」

祖母のたねが言った。洪作には曾祖母の顔はいつもと少しも変らなく見えた。平生でもその皺だらけの顔は、ひと握りほどの小ささになっていて、生きている人間の顔には見えず、置物か何かのようであった。

「死んだ？」

洪作が訊くと、

「これさ、まあ」

と、祖母のたねはたしなめたが、

「まだだ、もうそろそろだろう」

文太の方はそんな言い方をした。一座のたれも神妙な顔こそしておれ、少しも悲しんでいる風には見えなかった。今か今かと、みんなおしな婆さんの息を引き取る瞬間のやって来るのを待っている風であった。

これは初めて洪作が経験する身近な人の死の際である。ここで曾祖母を「置物」と表現しているが、洪作は以前からそう思っていた。本妻でありながら夫が妾と暮らすのを許し、夫が死んだ後は一日の大半を家の中の同じ場所で過ごしていた。そんなおしな婆さんを見て、洪作は「何のために生きているのだろうか」と常々思っており、物語の途中でも「置物」のようだという表現が見られる。

その曾祖母が今まさに亡くなろうとしている。しかし、誰一人悲しむ様子もなく、みな冷静で客観的であり、周りの大人も洪作も死に無頓着に見える。この場面で洪作は「死んだ？」と無神経に口にするが、大人は強く咎めない。洪作も大人たちの様子を観察し、おしな婆さんの死を皆が待つ雰囲気を感じている。もうすぐ70歳になろうとしている老婆は、当時してみれば大往生であり、洪作は子どもながらに大人の態度や様子、雰囲気をしっかり読み、曾祖母の死をどう考えているかを、全身で感じ取っているのである。そして、やがて臨終の場面を迎える。

「お亡くなりなされた。大往生じゃった」

そうたねは宣言するように言った。何人かの人が座を立てて階下へ降りて行った。

洪作には、曾祖母が死んだようには見えなかった。一瞬の前とあとで、生と死というまるで違った状態の中に曾祖母が置かれていることが信じられない気持ちだった。

そうしているうちに、洪作は、もう一度曾祖母の顔を見て来ようかと思った。本当に死んでいるか、どうか、もう一度自分の眼で確かめたい気持ちに襲われた。

洪作はまた上の家へ出掛けた。僅かの時間の間に、上の家は弔問客や手伝いの男女でごった返していた。洪作は大人たちの間からみつの姿を見付けると、

「お婆ちゃんの顔を見て来ようや」

と言った。みつはいつになく素直に頷くと、自分が先に立って二階へ上って行った。二階も先刻とはすっかり様子が変わっていた。白布で覆われた祭壇が作られてあり、何本かの焼香の煙が部屋にたちこめていた。洪作とみつとは弔問の男女がするように、自分たちも曾祖母の顔を覆っている白布を取って、その唇を濡れた綿でしめしてやった。おしな婆さんは今やはっきりと死者の顔をしていた。顔の色は土色に変じ、唇はやや固めに結ばれてあった。

この臨終の瞬間において、洪作は先程まで生きていた人が亡くなるということに非現実感を覚え、その状況が納得できないでいる。その素直な反応は実に子どもらしい。葬儀の準備が進む中、ついに洪作は本家に住む同い年のみつを誘い、曾祖母の死を確かめに行く。そこで大人と同じように死に水を取り、土色となった死者の顔をはっきりと確認する。ここは、一人ではなく、みつと死の共有体験をするという大切な場面である。

そして、村人が念仏を唱え始めると、洪作はおしな婆さんのことを次から次へと思い出す。生きていた時は他の孫やひ孫を鼻屑するなど、意地悪だと恨みがましく感じたこともあったが、なぜか腹が立たない。ところが、大人たちは曾祖母についての非難めいた噂話を始める。

——お婆ちゃんくらい星廻りのいい人はいなかった。薙刀と朱塗りの風呂桶を持って嫁に来なされた。

とか、

——みそ汁しか作れんと、一生嫁さんで通ったお方じゃ。それでいて極楽往生なされた。

とか、そんな曾祖母に対する非難とも讃歎ともつかぬ言葉が、一座の人々の口から飛び出していた。洪作はそうした曾祖母に対する噂を聞いているうちに、ふいに大きな悲しみが心にこみ上げて来るのを感じた。必ずしも曾祖母の死に対する悲しみではなかったが、曾祖母の死に関係したものであることだけは間違いなかった。

洪作は座を立つと、再び納戸部屋にはいり、蒲団の山に上って身を横たえたが、間もなく身内からこみ上げて来る悲しみに耐えかねて、泣き声を口から出した。一度声を口から出すと、間もなくそれは大声になった。

人々のおしなに対する悪口を聞いているうちに、洪作はなぜか悲しみがこみ上げ、ついに大声で泣き出すという場面である。だが、洪作にとって曾祖母はかけがえのない存在だったとは思われない。生前、自分の親代わりのおぬいを悪く言う曾祖母に対し、「おばあちゃん、いい年して死なんのか。いつ死ぬんだ？」と暴言を吐いたり、曾祖母の葬式のために離れて暮らす母親が帰

郷すると聞き、そんなことなら「おしな婆さんなど、とうに死んでしまえばよかった」などと言う場面さえあるからだ。

しかし、初めての身近な人の死を眼前にし、それほど思い入れのなかった人に対しても、その死を実感し、自分でも説明のつかない悲しみを感じている。それは、誰に教えられたわけでもなく、死んでまでその人を恨んだりしてはいけない、または、死んだ人のことを悪く言うまい、思うまいという気持ちの表れではないだろうか。それは死者に対する畏敬の念というものであろう。

物語の中で人は死期が近づくと、または死ぬと、いい人になるというような会話が、おぬいと洪作との間で何度か交わされる。人は死後仏になるという教育を自然な会話の中で行っており、洪作の死生観にも影響を与えている。だが、大人たちは死者を敬うことなくおしなを非難するような噂話をしたため、それに対する怒りや悲しみが、自分でも説明のつかぬ感情となって表出したのではないだろうか。この感情は、普段の積み重ね、日常の中にあるデス・エデュケーションから生まれたものと思われる。

## 5-2. 若い叔母「さき子姉さん」(20代前半)の死：小学校3年生の夏休みの終わり頃

\* 肺病で湯ヶ島を離れ、ご主人のそばで療養していたさき子の死を、本家に住む同年のみつから聞く。

「さき子姉ちゃん、死んだと」

みつは他人事のような言い方で言った。

「死んだって？」

「息を引き取った」

「たれが」

「さき子姉ちゃん」

「ふうん」

洪作にはさき子が死んだという意味がはっきり理解できなかった。さき子の病状が悪化しているということは耳にしており、みながそのことを心配していることもよく知っていたが、しかし、それをさき子の死と結びつけて考えたことはなかった。

洪作はみつに反対したいものを烈しく感じた。さき子がこの世にもう居ないということ、みつの言葉で信じなければならぬいかなる理由もなかった。

「死ぬか、ばか！」

さき子は当時にしては珍しく、結婚前に子どもをもうけている。閉鎖的な村社会において、彼女の存在は特別で、人の噂に上ることもあったろうが、小説の中ではあまり語られていない。それは少年には見えない部分であったためだろう。都会の香りがし、美人で気品のある雰囲気を持つ彼女は作者井上靖にとって、永遠の憧れの人であり、初恋の相手であったと想像できる。随筆『幼き日のこと』にも、若い叔母の思い出の中で「幼い私の最初の思慕の対象だったのであり、今思うと幼いながらも、相当な血道の上げ方だったと言うほかない」と述べている。



この場面では、さき子の死を認めたくないという拒否感、悲嘆のプロセスでいう否認とパニックが非常に素直に表現され、その受け入れがたい事実が怒りや不当感となって、みつに向けられている。しかしその後、大人たちが慰め合い、泣き出すのを見て、初めてさき子の死を現実として認めざるを得ない状況となる。だが、洪作のとった行動は悲嘆に暮れることではなかった。洪作は訃報を聞いた翌日から猛勉強を始めるのである。さき子は洪作の小学校の代用教員をしており、療養のために湯ヶ島を離れる際、洪作に「勉強しなさい」と言い残したのを思い出したためだ。それは、子どもであった自分ができる精一杯の、洪作なりの弔いの作業であり、グリーンワークの一つだったのである。

話は遡るが、さき子が湯ヶ島を発ったのは、深夜、人目を避けてのことであった。それを洪作は美しくも気高い彼女が、自分の病んだ姿を人に見られるのを嫌がったためだと悟る。その別れの場面で、洪作は次のように考える。

子供心にも、そうすることがいいことだと思われた。その方がいいのだと思う気持ちの底には、転地に依ってさき子の病気が快方に向かうかも知れないといった期待もあり、またその反対に人の言うように不治の病気なら、彼女は自分の夫や嬰子のもとで残りの生涯を過すべきだといった思いもあった。

死ぬはずはない、だが死ぬかもしれない、その切ない思いの中での悲しい別離は、結局、さき子との最期の別れとなった。そして、その体験があってこそ、洪作は心のどこかで彼女の死を覚悟したのである。つまり、死への準備教育がなされていたといえ、死の現実を目の当たりにしても、気丈に振る舞うことができたといえる。

さらに、場面はさき子の葬式当日へと続くが、洪作は葬儀には出ず、同級生たちとトンネルを見に行くという目的で天城峠を目指す。その途中、さき子の死についての話が出たとたん、全員で「なむまいだ、なむまいだ」と唱えながら歩いていく。

彼等がさき子の死に打ち興じているようなところは感じられず、みんながいかにその死を悼んでいるかのように見えた。実際にまた、子供たちは曾ての自分たちの教師であったさき子の死を悼んでいるのもあった。彼等は念仏に倦きると、彼等がさき子から教わった幾つかの唱歌を、たれからともなく次々に口に出して唄った。一人が唄い出すと、みんながそれに和して唄った。

洪作はずっと先頭をきって歩いて行った。それが自分に与えられた使命であるかのような気持ちで、峠へ峠へと休みなしに足を運んで行った。

時折、さき子の死が頭を掠めた。その度に洪作は、そのひんやりとした思いを振り棄ててもするように、頭に載せた着物の束を改めて確りと首に結びつけ、そして、

「頑張れ！」

と、そんなことを背後に向かって怒鳴った。

このように念仏を唱えながら歩くさまは、一見悪ふざけをしているように見えるが、さき子が

教えてくれた歌を歌うことで、さき子への感謝を表し、子どもたちなりにその死を受け止めている。これは死別による悲しみの共有体験であり、グリーンワークの一つでもある。また、洪作は背後に向かって「頑張れ！」と叫んだが、それは自分に向かって発せられているのであって、さき子の死の現実に耐え、必死で乗り越えようとしている姿である。湯ヶ島を発つ別れのシーン、そして、さき子の訃報を聞いてから、洪作がその死を受容しようとするまでの過程は実に丁寧に綴られており、少年の死生観に大きな影響を与えた衝撃的な出来事であったことは間違いない。そして、さき子の死の2年後、馬車で天城峠を通る際、この日のことを回想する場面がある。

その頃は人間の死というものが、どういうものかはっきりとは判らず、さき子がこの世の中から姿を消したということが、半ば信じられぬ気持ちであったが、いまの洪作はそれを彼なりの理解の仕方理解していた。

さき子は、あの日以来、自分とは反対の方向へ歩き出したのだ。自分はもう決してさき子と会うことはなく、さき子と自分との距離は刻一刻大きくなって行くだけなのだ。さき子はもう随分遠くへ行ってしまったが、これからはもっともっと遠くへ行ってしまおうだろう。こういうことが死というものなのだ。

洪作は小学校5年生にして、死というものを理解している。それを「自分とは反対の方向へ歩き出した」「これからはもっともっと遠くへ行ってしまおうだろう」と表現したところが印象的であり、少年の死生観を感じる言葉でもある。

曾祖母おしなの時は、死んだという物理的な感覚を確認しただけであったが、ここでは精神的な死を、子どもの感覚で理解したと思われる。また、『しろばんば』を書いたのは井上靖が53歳の時であったのだから、本来なら反対の方向へ歩き出すというより、自分もいずれはそちらの方向へ、という年齢である。それを、当時の心境そのままに表現しており、『しろばんば』が少年の視点で描かれていることがわかる。

### 5-3. 「おぬい婆さん」の死：小学校6年生の1月初め頃

\* 本家の祖母より、おぬいの死を知らされる。洪作はこの数日、高熱を出して臥せっていたので、ジフテリアに罹ったおぬいの病状の悪化も知らず、息を引き取る際にも居合わせなかった。

「洪ちゃ！」

洪作がおぬい婆さんの死に対して反応を示さないの、祖母にはそんな洪作が不気味に映ったらしかった。洪作は自分でも不思議に思われるほど、おぬい婆さんの死に対して、悲しみを感ぜなかった。ああ、そうかと思うだけで、あとはただ黙っていたかった。

「おぬい婆ちゃんは亡くなられた！」

祖母はまた言った。洪作はこんどもまた黙っていた。

—中略—

洪作はすっかりあくの抜けてしまったような気持ちで、一人でぼんやり横たわっていた。誰

も上って来なかった。おぬい婆さんは亡くなってしまった。もう土蔵の二階へ行っても、おぬい婆さんの姿を目にすることはできないのだ。おぬい婆さんは、もうこの世に居ないのだ。曾祖母のおしな婆さんのように、さき子のように、おぬい婆さんはこの世から突然姿を消してしまったのだ。

さあ、いよいよこれから、自分はひとりだ！ と、洪作は思った。父も母も弟妹もあったが、しかし、それとは別に、洪作は自分がこの世にひとり取り残されてしまったような気持がした。

そして、それと同時に、これは全く予想もしていなかったことだが、やっとのことでこれでひとりになれたといった解放感もあった。もうおぬい婆さんは居ないのだ。浜松なりと、どこへなりと、何の気にかかることもなく、自分はこの村から出て行ける、そんな気持もあった。

自分を溺愛したおぬいに対する死の受け止め方は、さき子の時のように、認めたくない、その死を受容できないというのとは異なる。実の両親も弟妹もいるのに「自分はひとりだ」と孤独を感じたのは、二人だけの時間に終止符が打たれたからであろう。だが、それだけでなく、複雑な家庭環境から自由になった解放感をも感じている。そこには少年の自立の芽生えと成長が見られ、悲嘆のプロセスでいえば新しい希望を見つけた瞬間でもある。

おぬい婆さんと二人きりの生活に不満はなかったにしても、離れて生活することは、おぬいが生きているうちは不可能であったと子ども心に考えていたのであろう。おぬいは生きていくために、洪作を必要としていたが、洪作もまたおぬい婆さんを必要としていた。したがって、その死によって、否応なく二人は引き離され、必然的に洪作はおぬいの庇護のもとから旅立つのである。

訃報を聞いた際、「悲しみを感ぜなかった」とあるが、洪作は泣かなかったわけではない。体調不良で葬儀に参列できず、土蔵の二階から葬列を見送る場面で、激しい感情が込み上げ、初めて涙が溢れ出すというシーンがある。高熱にうなされる中で突然知ったおぬい婆さんの死は、じわじわと彼の心を締め付けていき、その結果の涙であった。祖母の知らせに無反応だったのは、一度にあまりにも様々な感情が生じ、悲嘆のプロセスで言えば、ショックによる精神的打撃と麻痺、または精神的混乱によるアパシーの状態にあったためと考えられる。

葬式を終えたのち、しばらくしてから、洪作は母七重と土蔵の片付けをする場面がある。そこで母親が生活用品やおぬい婆さんの遺品を「汚い」と言って捨てようとする。

母は腹を立てた。

「汚いから汚いというのよ」

「汚いもんか」

「汚くなかったら、大切にしまっておいたらいいわ」

「うん、しまっておく」

洪作も意地になって言った。しかし、実際に土蔵の中から出て来るものは、どれも使いものにならぬ汚いものばかりであった。洪作は、そうしたものの一つ一つを、おぬい婆さんのために、一応母の攻撃から守り、そして、その上でそれを土蔵の横手で燃した。

母にしてみればガラクタで、汚いものばかりであったが、それらは二人の共同生活の証であり、おぬい婆さんが生きていた証でもあった。それを、他の人の手ではなく、自分の手で燃やすことによって、おぬい婆さんに最期の別れを告げたのであり、これも彼なりのグリーンワークである。それは、葬儀に参列することができなかつた彼にとっての火葬の儀式であったとも考えられる。

土蔵を片付けるのにまる二日かかった。土蔵をかたづけ終った時、洪作は一物もなくなったからっぽの土蔵の中に坐った。おぬい婆さんの死に対して感じたより、からっぽの土蔵の中に坐った時の方が、もっと大きい淋しさを味わった。窓からはざくろの木が見え、そのざくろの木の向うに田圃が見えた。その田圃から吹いて来る風が、北側の窓から南側の窓へと吹き抜けて行く。洪作は寒さも感じないで、そこに暫く坐っていた。もはやおぬい婆さんとの共同生活の思い出を持つ物は一物もなかつた。からっぽの部屋を、風が吹き抜けて行くだけであった。

おぬい婆さんが死去した際、「もうこの世に居ないのだ」と頭では理解した洪作であったが、土蔵を片付けることで大きな寂しさを覚え、からっぽという空虚感を味わうことにより、「死とは消えて何もなくなる事」であるのを実感している。そして、そのような状況であっても、周りの風景は何も変わらないという現実を思い知るのである。

## 6. 『しろばんば』が教えてくれること

『しろばんば』は多少フィクションの部分はあるにせよ、殆どは井上靖本人の体験に基づく実話である。それは『幼き日のこと』を見ても明らかである。つまり、これは井上少年の死の受け止め方、死生観がそのまま描写されていると言える。ここでは、3人の死の場面を取り上げて見てきた。これ以外にも、畏にかかったひよどりの死骸を手にして死を触覚で知る場面や、家庭教師の自殺騒動などを体験する場面もある。しかし、事件性がなく淡々と語られる日常の中の死別体験は、少年に様々な学びを与え、その成長に大きな影響を及ぼしたという点から、おしな、さき子、おぬいの3人の死は大きな意味を持つ。

大正期はまだ死が身近で、誰に教わることもなく自然にデス・エデュケーションが行われており、そういう意味で、実に健康的な時代であったことは言うまでもない。その中で、少年は死を見つめ、少年なりのグリーンワークによって死を受容し、消化しようとしている。おしな婆さんは初めての身近な人の死であったが、その生と死の境界を目の当たりにして、彼女の死を確かめ、確信したのは死者を敬うことを無意識のうちに行っている。また、さき子の死を知ったとき、死んでしまったという悲しみとは別に、自分を励まして鼓舞し、死という現実を受け入れようとする姿は印象に残る。

だが最も印象的だったのは、一番自分に愛情を注ぎ、全力で育ててくれたおぬい婆さんの死に際し、孤独を感じながらも、やっとひとりになれると安堵する場面である。そこには依存心のかげらもなく、少年が成長している様を見て取れる。この場面には少年の「したたかさ」が感じられる。死の現実はそのれとして、希望に満ちた未来ある自分の姿を見つけた感覚はどこか冷めており、おぬい婆さんの役割は終わったのだと知っているかのようであった。また、おぬい婆さんだ

けでなく、さき子の時もそうであるが、大切な人の死を体験することで、残された自分がこれからどう生きるかについて考えている。洪作は特殊な家庭環境で育ったが、そのような環境であったかどうかに関係なく、この「したたかに生きる強さ」は、いつの時代でも人は持っている、それを糧に成長するものなのだ。そして、それは日常のなかにあるデス・エデュケーションによって育まれると言えるのではないだろうか。

物語の最初に、洪作を取り巻く複雑な人間関係が詳しく説明されているのだが、このような家庭環境の中で、なぜ少年はすくすくと育っているのか不思議であった。その答えの鍵は周りにいる大人にあると思われる。先に、「誰に教わることもなく自然にデス・エデュケーションが行われている」と述べたが、実は大人が子どもに見せ、教えているのである。それは、説明されて教えられるものではなく、普段の生活の中で口に出したり、態度で示したりしているのであり、それを子どもはよく見ているということなのだ。その意味で、当時の子どもたちは「誰に教わることもなく」自らの観察眼で学び取っていたといえる。子どもたちを取り囲む大人の果たす役割は大きい。

特に、おぬい婆さんの「生きて、愛して、死ぬ」という生き様、その惜しみなく注がれる愛情が、少年期にいかにも重要であるかを、この小説は教えている。そこには血縁関係など意味をなさない。道を外れて非行に走ることも、あるいは溺愛のせいでわがままになることもなく、周囲に配慮しながら成長している洪作の姿から、大人が常に子どもに気を配り、温かい目で見守り、人間の「ありよう」をそのまま見せるという当たり前のことが、何より大切なのだと改めて気づかされる。

また、たとえ子どもであっても、「死」に直面するたびに、それなりに何かを感じて受け止め、成長していくのだということも、この物語は伝えている。しかしながら、現代では難しいデス・エデュケーションが自然な形で行われている環境を、ただ、いい時代だったといって終わらせてはいけない。かつて、家庭や地域の中で共有体験として行われていたデス・エデュケーションを現代でどのように甦らせるかは重要な問題である。

時代は変わっても、子どもたちは成長の中で、洪作少年のように様々な別離や死に出あうであろう。しかし、少年期において適切なデス・エデュケーションを経験しないまましていると、死に対して無頓着であったり、無感情であったり、テレビやゲームの中の出来事のように他人事に感じたり、人間が持つ「したたかさ」が間違っただけに変容してしまったりする可能性がある。子どもであるからといって、臨終の場や死にまつわる場面を、隠したり、避けたり、ごまかしたりするのではなく、自然のままに体験させることの重要性を、この小説は教えているのである。

## 7. まとめ

小説のタイトルである「しろばんば」の説明は冒頭に出てくるが、それは夕闇が迫るころに現われ、綿屑が舞うように浮遊している白い虫のことで、「白い老婆」のようであることから名づけられたとある。それがふわふわと、どこからともなく飛んできて、子どもたちの遊び時間の終わりを告げる。それは街灯もない田舎の夕暮れを想像させる一風景にすぎないが、『幼き日のこ

と』には「小学校へ上がるようになると、夕暮というものは、淋しさと怖しさの入り混じったものとして感じられて来る」という記述が見られる。それは特に、しろばんばが舞う、晩秋から冬に感じたとあり、さらに、しろばんばを木の枝などでひっかけて追いながら、「こんどは自分たちが何ものかの大きな手にひっかけられそうな恐怖感に襲われる」と述べている。晩秋から冬にかけてを人生になぞらえるのであれば老年期であり、死を最も身近に感じる時期である。人は小学生になるころから、不安や恐怖を知り、やがて死を意識し始めるのだということを、「しろばんば」という言葉に表しているように思われた。

子どもたちの不安や恐怖をただ取り除くのではなく、うまく対処できるように導くのは、様々な別れや悲しみや死を経験した大人たちの仕事である。しかしながら、大正時代と違い、高度な医療技術の恩恵によって日本は世界一の長寿国となり、子どもから見れば大人である30、40代でも、親の死を経験したことがないという人は多い。そのせいもあってか、死を語ることは縁起が悪いなどと言って、殊更に忌み嫌う人もいる。留学生のようにある程度、宗教的基盤があれば、身近に死を意識し、人と語り合う機会もあると思われるが、現在の日本では難しい。それでも、誰かが語りかけていかなければ、死はますます日本人の生活から遠ざかっていくであろう。そうなれば、死に対して必要以上の不安や恐怖だけを与えるものになりかねない。

現代では「いのちの教育」として小学生の頃から授業でデス・エデュケーションが行われているが、教育現場におけるいじめ、自殺、他殺など、様々な悲惨な事件は絶えない。本稿の冒頭でも触れたように、大学においては精神的な問題を抱える学生も増えたが、目標が持てずに何となく入学し、自分の存在意義や価値を見出せなくなる学生も多い。また、不況が続き、親がリストラにあって希望を失うこともある。しかし、その困難を乗り越えて生きていく術は持ち合わせておらず、リストラや自殺などの命を軽んじた行動を起こしてしまう場合もある。このような状況を少しでもよくするためには、幼稚園、小学校、中学、高校、大学へと成長するなかで、その年代に合わせた「共有体験をもとにしたデス・エデュケーション」が必要である。ここでいう共有体験とは必ずしも死にまつわるものだけではなく、人が感じる不安・恐怖・悲しみ・寂しさ・痛みなどあらゆるものを指している。

もちろん、大正時代のような自然な形でのデス・エデュケーションは現代の環境や状況では困難である。しかし、いのちの教育を子どもだけが学校の中だけで学んでも意味がない。家庭や地域にいる周りの大人が死から目を背け、子どもに語りかけないという現状が一番の問題なのである。平山（1984: 184）は「人は生きてきたようにしか死ねないという。もしそうだとすれば、われわれは毎日毎日の生の真只中において、人格の成熟への努力を怠ってはならないということになるだろう」と述べている。したがって、現代ではまず、大人に対するデス・エデュケーションが最も重要であるといえる。大人が生と死から目を逸らさずに成長していく姿を見せなければ、子どもたちに生きるということを伝えることはできないからである。教育現場で言えば、教職員はもちろんだが、保護者をも巻き込んだデス・エデュケーションが必要なのである。

## 引用・参考文献

- アルフォンス・デーケン（1984）「悲嘆のプロセス」 曾野綾子/アルフォンス・デーケン編著『生と死を考えるセミナー第1集 生と死を考える』春秋社
- アルフォンス・デーケン（1996）『死とどう向き合うか』NHK出版
- アルフォンス・デーケン・柳田邦男編著（1997）『生と死を考えるセミナーシリーズ第6集〈突然の死〉とグリーフケア』春秋社
- アルフォンス・デーケン（2001）『生と死の教育』岩波書店
- 井上靖（1965）『しろばんば』新潮文庫
- 井上靖（1976）『幼き日のこと・青春放浪』新潮文庫
- 大林雅之（2008）「生死のかたち『日本人の死生観』と生命倫理」近藤功行・小松和彦編著『死の儀法—在宅死に見る葬の礼節・死生観—』ミネルヴァ書房
- 河野友信・平山正実（2000）『臨床死生学事典』日本評論社
- ケイ・ギルバート著・大石佳能子訳（2005）『悲しみから思い出に—大切な人を亡くした心の痛みを乗り越えるために—』日本医療企画
- 近藤卓「わが国におけるいのちの教育」（2009）近藤卓編著『現代のエスプリ499 いのちの教育の考え方と実践』至文堂
- 近藤均・酒井明夫他編著（2002）『生命倫理事典』太陽出版
- 「特集[死]」（1994）『CREA 3月号』文藝春秋,pp.84-88
- 得丸定子編著（2008）『「いのち教育」をひもとく—日本と世界—』現代図書
- 平山正実（1984）「生と死を考える」曾野綾子/アルフォンス・デーケン編著『生と死を考えるセミナー第1集 生と死を考える』春秋社
- 平山正実（1985）「生と死の教育—とくに生涯教育の中で—」樋口和彦・平山正実編著『生と死の教育 デス・エデュケーションのすすめ』創元社